

「そのとおりだよ、びっくりするぞお」

「知ってるように、台風の被害で米が無くてね、運よく向こうの人から粳米うるちと糯米もちぎを少しずつ分けてもらえたよ。ところが値段が高く金が足りなかったので、大事な懐中時計と交換したんだ。このことは誰にも内証だよ」

この年より九年前、昭和十三年の夏に父は日中戦争で戦死している。この時計はその時遺品で届いた分身だと教えられていた。それだけに、母は深く思い悩んだ末、食べ盛りの子供達のために手放していた。

夏祭の夕方がやってきた。大地に抱かれているわが家の畑と里山から採れた、人参、ごぼう、大根、竹の子、椎茸などの煮染がいつもと変わらず、古びた食台にわんざと盛られている。これと並んで「夏祭のよいこと」と書いた箱の中に、黄粉きんこと白砂糖をこつてりとまぶした牡丹餅が、黄金色に輝いて見える。

なにも知らない弟達は大喜びなのに、私は皿に盛られた母の喜びとせつなさに耐えきれず、大粒の涙を止めることができなかった。